

す。

(八) 嫡母と庶子

民法第七百二十八條に、嫡母と庶子との間に於ても亦親子間に於けると同様の親族關係を生ずるとありませう。嫡母と庶子との間柄を解し易いために例を擧げて申しませう。

甲乙の男女が私通しまして、其女に子が出来たとせば、之れを私生子と云ひます。この時に男の方が、之れは私の産ませた子であると云つて認知届を戸籍吏に差出しますと、其子は私生子の名を變じて、こゝに庶子と言はれるのであります。

この嫡母と言ふ語は、常に庶子に向つて用ひるので、民法上單に母と申します時は、私生系統の母を指すことがありませうので、之れを區別する爲め

に、特に父の正妻を指して嫡母と云ひます。

フレーベル會俳句端書集

一、課題 當季雜吟一人十句以下

一、締切 五月二十五日限り

一、披露 明治三十八年七月發行本誌文苑欄

一、賞品 天地人三座には美景を呈す

一、撰者 當分本會の撰とす

一、投稿 本誌購讀者は何人にも投稿する事を

得用紙は繪葉書に限り(眞筆刷物隨意)住所氏名雅號を明記し必らず

左の名宛にて送らるべし

埼玉縣入間郡芳野村

フレーベル會俳句掛

鹽野奇零宛

第十回俳句端書集

微發の馬並びけり桃の花 東京 久米 辰子

牛嗅き小村へ出たり桃の花 同

砲車軋る柩の上や花吹雪 同

菜の花や流車に乗^{ちま}り一と丁場 同

旅順開城の早かりしな存外に尻の弱さや落椿 同

繪葉書に一句添えけり花便り 陸奥 須藤美佐子

薄着して風邪ひく春の寒さ哉 同

噓して障子しめけり梅の窓 同

戈取て汲む酒甘し桃の花 仙台 立花 せん

世は軍桃園の、冥徳はれぬ 同

外塚の名残ありく、声の角 同

石垣の半ば崩れて声の角 同

掃きかへすあとや椿の二三 東京 平岩 學洋

元祿の風情も床し花見人 同

まだ花に早し人出の向島 同

爐塞きや壘一壘新らしき 同

旅人もまだ氣のつかず初歲 武藏 月田 一甫

白妙の不二や余寒の遠景色 同

雲雀野や笠を荷にする雨上り 同

囁りて居るや野の鳥籠の鳥 同

チ、チ、と先づ啼き初鳥雀の子 秩父 青葉 尹人

ラケット擔いだ肩や花の散る 同

暗夜や戀の眞味は知らねども 同

初戀の顔見合せぬ朧月 同

小草萌ゆる岡の彼方や人霞む 同

寺の猫佛間に妻を尋ねけり 同

雛子啼くや夕日の残る雜木山 同

摘草の春となりけり紫野 豊前 金子 琴月

養ふて鉢に愛すや櫻草 同

行春の眠りさめけり雷一とつ 栃木 櫻井 閑山

坐布團を枕に春の假寝かな 越後 加藤 春陽

寒食の窓より見るや田螺とり 同

蕨野や露美しく旭の昇る 常陸 落花 籠

菜の花や馬にゆられて頬冠り 上總 高橋 波月

水や草や恍惚として霞みけり 同

安房の山上總の丘や初霞 上野 加藤よし子

追 加

摘草や石を並べて渡る溝 無一庵 奇零

まだ早き櫻に惜しむ戻りかな 同

春風や薬師が前の飴細工 同

薄月に訪ひよる人や柳影 同

茶を立て、春惜みけり晝の雨 同

新婚の旅の戻りや春惜しむ 同

山 吹

林 天 然

雨にそぼてる山吹は

黄金玉なす許りなり

みかりくらしして丈夫が

駒をとめし柴の戸ゆ

みのなきこそと少女子が

花も恥らふ風情にて

語らぬ心意の優しさに

思を千々に碎さけるかな

愛國婦人會總會の記

紫波ゆかり子

四月二日第四回愛國婦人會總會を九段偕行社に

て開かる、車軸を流す計りなりし昨夜の雨は、今